

「人は生きて学ばならぬ」コンスタンス・チャタレイ — 戦後70年「戦後は遠くなりけり」ではなく、身近に！ —

「人生に必要なものは 勇気と創造力と少々のお金だ」チャールズ・チャップリン

「人生は前に進むものだが、振り返ることによって理解される」とは実存主義の創始者、セーレン・キルケゴール(デンマークの思想家、1855年42歳で没)のことばだ。後ろから振り返らないとその答えがわからないことが多い。

「昭和は遠くなりけり」であるが、今年の戦後70年は「戦後は遠くなりけり」ではなくなった、身近になった。最近の政治的問題からである。

一方、『昭和ロマン』ともいふべき”生活文化“が懐古的なブームともなっている。音楽(歌謡曲)や町並み(看板、長屋横町など)、食べ物(駄菓子、ハヤシライス)、玩具、生活雑貨などは、戦後という時代の一景色でもあるが、昭和レトロ時代のそれでもある。

その人気(?)は、戦後日本の驚異的とも言える経済成長と平和社会を維持してきた日本人の今日の政治的問題へのアンチテーゼからなのか。冒頭のことば「後ろから振り返らないとその答えがわからないことが多い」という戦後70年間の哲学的な対象からなのか。

戦後70年、今年はとくに、第二次世界大戦に関する戦争の報道が多い。報道のなかでも昭和天皇の終戦の詔勅(玉音放送8月15日)放送は、戦争を反省し、平和社会を望む含蓄のある国民へのメッセージは衝撃的、感動的である。

このほど、トヨタカローラ札幌の創業者である柿本胤二相談役は「マンガで綴る自分史」(業界NO1の会社を志した 柿本胤二とトヨタカローラ札幌物語)を自費出版した。その中で、第二次世界大戦に学徒出陣、メロン島で地獄を経験し、奇跡の帰還をした経験から「今年は戦後70年になりますが、『人間にとって、戦争のない平和な社会ほど幸せなことはいない』ことを我々は学びました。自分の青春時代は、戦争体験で青春の良き日を犠牲にせざるを得なかったが、これからの人たちは、いつまでも青春の心を持ち続け、また人の命を大切にす真心、良心を持って、平和で豊かな人生をおくって欲しいと願っています。本書に付録とした、昭和天皇の『終戦の詔勅』は今、日本人にとって古くて新しい含蓄のある、平和への『道しるべ』と思い紹介しました」と宣戦の詔書と終戦の詔勅(玉音放送)の原文を付録として紹介している。

イギリスの小説家D・H・ローレンスの小説『チャタレイ夫人の恋人』の導入部分で「われわれの時代は本質的に悲劇的な時代である。だからこそわれわれは現代を悲劇的にとらえようとはしない。世の中に大変動が起こった結果、我々は廃墟の中にいて、新たな、ささやかな希望をもとうと、新しい、ささやかな住居を建て始めている。それはかなり困難な仕事だ。今は未来に通じる平坦な道はないが、障害にぶつかれば、回り道をするか、這い上がって超えていくかするのだ。人は生きていかねばならない。幾度び不足の災害に襲われようとも」。以上が、コンスタンス・チャタレイのおかれた状況である。第一次世界大戦は彼女の頭上の屋根を落させ、彼女の運命を狂わせたのだった。そして、彼女は、人は生きて、学ばならぬと悟ったのである。2011年3月11に発生した東日本大震災の記憶が蘇る。

「人生に必要なものは勇気と創造力と少々のお金だ」とは、老境に入った笑いの力で反戦を訴えた喜劇王、チャールズ・チャップリン(1889年ロンドン生まれ、97年88歳で没)、自身の心境や人生観を反映した作品とされる映画『ライムライト』での名言だ。 戦後70年の今日、世界の名作映画も懐かしく元気づけられる。何ごとも平和であればいい。

本誌編集長 佐藤 公(さとうたかし)